

王であるキリスト、十字架のイエス

ルカ 23 章 35-43 節

(そのとき、議員たちはイエスを) あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」そして、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と言った。するとイエスは、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

説教

聖書になじみのない方からすれば、なにがなんだかわからない箇所になるかもしれません。いきなりキリスト磔刑シーンからはじまります。ここにいたるまでの経緯をざっと説明すると、故郷ガリラヤを旅立ったイエスは首都エルサレムに到着します。布教活動をしていたイエスは弟子ユダの裏切りにより逮捕され裁判にかけられます。有罪が確定しイエスを含め三人の処刑がはじまる、これが今日の福音箇所です。

登場人物は発言順に「議員たち」「兵士たち」「犯罪人A」「犯罪人B」

「イエス」となります。議員、兵士、犯罪人Aは同じこと、他人を救ったんだから自分も救ってみろとっています。犯罪人Bは彼らとは違うことをいいます。

「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」 23:42

イエスはこう答えます。

「アーメン、あなたは今日わたしと一緒に楽園（パラダイス）にいる」 23:43

これが王であるキリストとしての答えということになります。十字架に吊るされているのになんかリアリティのないやりとり、気の抜けた迫力に欠けた問答にも感じます。

ところで、キリストが王であるという理解の背景には、キリスト教神学の「キリストの三職二状態」という概念（プロテスタント改革派、主流となっている考え方）があります。この概念はイエス・キリストは三つの職務「預言者、祭司、王」を二つの状態「へりくだりの状態、高拳（こうきょ）の状態」で務めるという理解のしかたです。きょうの福音箇所当てはめるとキリストは王としての職務を「へりくだりの状態」で実行しているということを表していると解釈します。

みじめにも弟子の裏切りによってお縄になり、そこでイエスはさんざん侮辱されて鞭で打たれ処刑場に引き立てられます。しまいには悪党といっしょに十字架に吊るされ処刑が執行されようとしています。へりくだりという言葉が謙譲・謙遜という意味をはるかに通り越して、ただただ惨めなだけのようにも思えます。しかし、イエスは犯罪人Bの願いに答えて王として楽園（イエスの国）への入国を許可します。

「アーメン、あなたは今日わたしと一緒に楽園（パラダイス）にいる」 23:43

でもこれじゃ、あーそうですか、そういうことなんですね、とすんなり理解できない、きょうの福音だけ読んでいてはではこのように理解することは難しいとおもいます。この感覚をこう表現している方がいます。

荊冠（けいかん）の王にかんする理解の欠け（水草修治牧師）

<http://d.hatena.ne.jp/koumichristchurch/20120401/p3> 参照

キリスト教は高拳、高く拳（あ）げられたイエスのことばかり強調してとくに近現代での欧米諸国は力による平和を志向している、結果として世界の平和に貢献できていない、それはへりくだりのイエス、荊冠の王という観点から

の理解ができていないからだろうという意見です。いわれてみれば確かにそうです。

この見方はこの考え方からも補強できそうです。「不合理ゆえにわれ信ず」という言葉があります。キリスト教の伝統的な理解の方法ではこうなります。

「神の子が死んだということは、ありえないことであるがゆえに事実であり、葬られた後に復活したというのは、信じられないことであるがゆえに確実である」

きょうの福音では犯罪人Bはいきなり回心して、イエスにわたしを思い出してくださいとお願いし、イエスはわかった（アーメン）と答えています。この十字架上での犯罪人とイエスのやりとりは、ありえないことであるがゆえに事実であり、信じられないことであるがゆえに確実、なごと、不合理ゆえにわれ信ず、となります。

また今年も年間の最後のテーマ「王であるキリスト」を前に煮え切らない終わり方をしていますが、わかったような気分で終わるより、わからないままで終わったほうがちょっとはましかな、とわたしは考えています。来週からはいよいよ待降節が始まります。年間最後の一週間、そして、きょうの主日が良き日になりますように。